

ときめき人

Tokimeki bito



令和とともに歩む 町の小さな演芸場 植正踊楽館

うえししょうようらくかん

中田町・森六荒谷

植正 まさとしさん

うえししょう・まさとし
(本名 佐藤 正利さん)
1954年生まれ 血液型/A B型



Profile

造園業を営む傍ら、2008年54歳の時、本格的に舞踊を習い始める。60歳で「舞踊一座 植正一家 初代 植正 まさとし」として旗揚げ。18年「町の小さな演芸場 植正踊楽館」が完成。演芸場は、毎月イベントを開催するほか、地域行事などにも貸し出し可。詳しくは、☎090(6788)4501まで。

「ここでは、みんなで造りあげた演芸場。地域の人はもちろん演芸愛好家も気軽に訪れ、みんなが楽しめる交流の場にしたい」と笑顔で話す舞踊一座 植正一家初代植正まさとしさん。

仕事が軌道に乗り、子どもも手を離れた50過ぎ、昔からやりたいと思っていた股旅舞踊とマドロス舞踊を習うために弟子入り。5年の修行を経て舞踊家として旗揚げした。

演芸活動で地域の人たちを楽しませたいと考えていたとき、石森蓬田地区で30年ほど前に使っていた組み立て式の舞台を寄贈された。最初は舞台しかなかったが、よりよい環境で観覧できるようにと、知り合いがサッシや使わなくなった戸を持ってきてくれて、徐々に演芸場へ。昨年11月に

完成し、3月には「第1回植正杯股旅一般舞踊宮城登米大会」を開催した。

「芸を持っている人は、披露する場が欲しいと思っています。ここでは、誰もが芸を披露できる場であり、お客さんとの距離が近い分、踊り手とお客さんが一体になれる」と演芸場の魅力を話す。

自身の活動は演芸場を飛び出し、敬老会の余興を頼まれたり、地域のお祭りを盛り上げるためボランティアで舞踊を披露したりしている。

「お客さんだけでなく踊り手も含め、みんなが楽しめる舞台を目指しています。楽しんでくれる人がいるうちは続けていきたいですね」。令和の時代とともに幕を開けた町の小さな演芸場の舞台には、みんなを楽しませる植正さんがいる。

編集後記

▼一期一会。その言葉には「その一度が素敵な経験であったとき」や「出会い一つ一つを大事にする」という意味が込められています。この仕事は、多くの人との出会いがあり、今回も私にとって忘れることのできない出会いがありました。これからも一期一会を大切にしていきます。(高橋)

▼今年のゴールデンウィークは10連休。こんなに休むと心配されるのは、五月病です。新たな環境に適應するための疲れや人間関係のストレスを感じ始める時期で、無気力や食欲不振といった症状が出るそうです。適度な休息・ストレス解消で体調管理に気を付けたいものです。(小野寺)

▼元号が令和になり、今回発行の6月号が新元号での初発行号になります。昭和最後の年に生まれた私は、平成と同じく年を重ねてきました。元号は変わりましたが、今まで通り学ぶ気持ちを刻んでいきたいと思えます。(三浦)



登米市メール配信サービス

(防犯や防災、イベント・市政に関する情報をメールでお届けします。)
<https://mail.cous.jp/tomecity/>

